



Title	Eタンデムにおける動機づけのメカニズム：日本語学習者とドイツ語学習者のケース・スタディ
Author(s)	脇坂，真彩子
Citation	大阪大学，2014，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33855
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (脇坂 真彩子)	
論文題名	Eタンデムにおける動機づけのメカニズム ー日本語学習者とドイツ語学習者のケース・スタディー
本研究は、ドイツ人日本語学習者と日本人ドイツ語学習者のEタンデム・プロジェクトの本質的な多元的ケース・スタディにもとづき、Eタンデムにおける動機づけのメカニズムの解明を試みるものである。 本論文は10章から成っている。第1章では、1960年代後半にドイツとフランスの和解という政治的な文脈で生まれたタンデム学習が、1990年以降のIT技術の進歩とインターネットの急速な普及に伴い、対面式だけではなく、インターネットを利用した「Eタンデム (eTandem)」もなされるようになったという歴史を概観している。第2章では、まず、本研究の主題であるタンデム学習と第二言語学習の動機づけの先行研究について整理し、これまでのタンデム学習における動機づけ研究の問題点を述べている。その上で、本研究が、第二言語における動機づけを研究するためには、抽象的な議論ではなく、多層的かつ流動的で複雑な文脈の中に存在する実在の人物に焦点をあてることが重要だとする、Ushioda (2009) の主張に賛同する立場を取ることを示している。 第3章では、本研究の方法論として用いたケース・スタディについて、その特徴と種類、分析方法を述べている。第4章では本研究の調査として実施したEタンデム・プロジェクトについて解説している。第5章では、第2章で述べたタンデム学習および第二言語学習の動機づけの先行研究の知見をふまえ、問題の所在を明確にし、本研究の目的と、リサーチ・クエスチョンを提示し、研究デザインを示している。本研究のリサーチ・クエスチョンは、1) Eタンデム・プロジェクトに参加した、ドイツ人日本語学習者と日本人ドイツ語学習者、それぞれの動機はプロジェクトの期間中にどのような要因によって変化していたのか、2) Eタンデム・プロジェクトに参加した、ドイツ人日本語学習者と日本人ドイツ語学習者のタンデム・ペアがEタンデムを続けることができたのはなぜか、あるいは続けられなかったのはなぜか、3) Eタンデムにおける動機づけのメカニズムの解明、の三つである。本研究では、Eタンデム・プロジェクトに参加した三つのペアをケースとして、本質的な多元的ケース・スタディを行った。収集したデータは、Eメール交換のログ、Skypeセッションの録音／録画データ、学習日記、活動に使用した資料といった学習活動データや、インタビューデータ、フィールドノート、コーディネーターが協力者とやり取りしたメールおよびチャットのログ、研究日誌である。これらのデータをもとに、ケース内分析 (within-case analysis) とケース間分析 (cross-case analysis) の2段階の分析を行った。 第6章から第10章では、本研究の分析結果が示されている。 まず、第6章～第8章のケース内分析では、Davidさんとナナさん (第6章)、Charlieさんと裕子さん (第7章)、LeaさんとAさん (第8章) という三つのペアのケースに焦点をあて、それぞれの学習者が、Eタンデム・プロジェクトが始まる前にどのような学習動機を持ってプロジェクトに参加したのか、また、その動機がパートナーとの学習活動の中で、時間の経過とともにどのように変化していったのかが、実際に何が起きたかを再構築する形で記述されている。その上で、学習者それぞれの動機を変化させた要因はどのようなものだったのかが分析される。さらに、各ケースにおいてEタンデムが続いたのはなぜか、あるいは続かなかったのはなぜかが考察されている。 それによれば、ケースⅠとなるDavidさんとナナさんは、プロジェクトの枠組みで決められた期間の後もEタンデムを続けたが、それは、Eタンデムが二人にとって特別な機会であったこと、決められたテーマに沿いながらもそれぞれがやり取りの内容を選択できたこと、決められた枠組みを自分たちのやりやすいようにアレンジしたこと、タンデム・パートナーとして互いに助け合えたこと、互いに気遣うことができたこと、そして、二人にとっての妥協点を見つけることができたことが要因となっていた。 ケースⅡとなるCharlieさんと裕子さんのやり取りは、互いの言語学習を目的とするタンデム学習と呼べるものではなく、決められた期間の後も続いていた。Charlieさんと裕子さんのやり取りがタンデム学習ではなくなったのは、CharlieさんがEタンデムでの日本語学習をやめたからであり、それは、初めてのSkypeセッションをきっかけに、Charlieさんのやり取りの目的が、日本語学習や日本文化を学ぶことから、研究室で話されるのとは異なる話題についてドイツ語で裕子さんと話すことへと変化したからであった。一方、Charlieさんが日本語学習をやめた後も二人のやり取りが続いたのは、Skypeでのやり取りが二人にとって特別な機会であったこと、決められた枠組みに縛られ	

ず自分たちの都合に合わせてやり取りしたこと、二人が互いに面倒を見合う関係であったこと、やり取りで互いに求めているものが得られたこと、互いに気遣うことができたこと、そして、二人にとって都合の良いやり方を見つけることができたことが要因となっていた。

ケースⅢとなるLeaさんとAさんは、決められた期間の後、AさんがLeaさんからの連絡に応じなくなり、Eタンデムは続かなかった。AさんがLeaさんからの連絡に応じなくなったのは、訂正活動の複雑さによる負担と、「教える－教えられる」という役割関係が構築されたことによる負担、そして、週ごとのテーマが設定されていたことによる負担、の三つの負担を感じたことが原因ではないかと思われた。

続いて、第9章のケース間分析では、ケース内分析の結果をふまえ、1) AさんがEタンデムをやめたこと、2) CharlieさんがEタンデムでの日本語学習をやめたこと、3) プロジェクトの枠組みによって決められた期間の後、どのペアもEメールの交換活動を続けなかったこと、という3点に注目し、なぜそのような事態になったのかがケース間で比較分析されている。

それによれば、まず、AさんがEタンデムをやめたのは、ナナさんと裕子さんがメールの負担を感じた際に、自分の状況に合わせてやり取りの仕方を調整したり、相手と交渉したりして、切り抜ける方策を講じていたのに対し、Aさんはそのような調整や交渉を行わず、一生懸命ガイドラインに沿おうとし、ひたむきにLeaさんの要求に応じようとしたからではないかということが明らかになった。

次に、CharlieさんがEタンデムでの日本語学習をやめたのは、第1に、CharlieさんのEタンデムを始める前の学習動機が、DavidさんとLeaさんのように日本語学習そのものではなく、日本語を使って別のことを達成するためのものであったことによって、日本語学習をせずしてそれが満たされたために無くなったこと、第2に、Eタンデム・プロジェクトに参加していた際、日本にいたCharlieさんにとって、パートナーとのやり取りはドイツ語で話せる特別な機会であったこと、第3に、ドイツにいたDavidさんとLeaさんに比べ、日本にいたCharlieさんにはプロジェクトに使える時間が少なかったことが影響していたと思われる。さらに、そのような状況の中で、DavidさんとLeaさんに比べ、Charlieさんがそれほど熱心にメールを書かなかったために達成感を持つことができなかったと思われることも影響していたと考えられる。また、CharlieさんとAさんが共にEタンデム・プロジェクトでの目標言語学習をやめたのは、Eタンデム・プロジェクト以外にも目標言語を学習する場があったために、比較的容易に、Eタンデム・プロジェクトでの学習をやめることを選択できたからではないかということがわかった。また、AさんがLeaさんとの連絡を完全に絶ったのに対し、Charlieさんが日本語学習をやめた後も裕子さんとのやり取りを続けたのはなぜかを検討した結果、CharlieさんがEタンデム・プロジェクトで感じた負担を相手に伝え、やり方を自分の都合の良いように変更するためにパートナーと交渉した一方で、Aさんはそれを相手に明示的に伝えず、やり取りの仕方を相手や枠組みに合わせようとしたことで、やり取りを続けることが現実的に困難となったのではないかということが明らかになった。

さらに、Eメールのやり取りが、決められた期間の後、どのペアも続かなかったのは、Eタンデム・プロジェクトに参加した際、日本で暮らしていたCharlieさん、ナナさん、裕子さん、Aさんには、ドイツで大学生活を送っていたLeaさん、Davidさんほどプロジェクトに使える時間がなかったためだとわかった。また、Charlieさん、ナナさん、裕子さんには、Eタンデム・プロジェクト以外の場面で、読み書きを学ぶ機会があったために、Eタンデム・プロジェクトでわざわざメールを書く必要はなかったと思われる。メールのやり取りは、ペアの双方がメールを続けたいと思わなければ続かないため、どのペアも続かなかったのだと思われる。

第10章では、ケース内分析、ケース間分析の結果を総合し、Eタンデムが続くかどうかを左右する要因についての結論が述べられ、提言と今後の課題が示されている。それによれば、Eタンデムが続くかどうかには、1) タンデム学習以外に目標言語を学習する機会があるか否か、2) タンデム学習に使える時間がどのくらいあるか、3) タンデム学習を始める前の動機が目標言語そのものに関するものかどうか、4) タンデム学習が始まった後、学習者自身が目標言語でのやり取りに熱心に取り組んだかどうか、5) 内容ややり方を自分の都合に合わせて調整できるか否か、6) やり方をパートナーと交渉できるか否か、という6つの要因が関わっていることが明らかになった。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (脇 坂 真 彩 子)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 青木 直子
	副 査 大阪大学 教授 渋谷 勝己
	副 査 大阪大学 教授 高木 千恵
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：E タンデムにおける動機づけのメカニズム

－日本語学習者とドイツ語学習者のケース・スタディ－

学位申請者 脇坂真彩子

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 青木直子

副査 大阪大学教授 渋谷勝己

副査 大阪大学准教授 高木千恵

【論文内容の要旨】

E タンデムとは、インターネットを使って、母語の異なる二人の学習者が、互いの外国語学習を助け合うという学習方法である。本論文はドイツ人日本語学習者と日本人ドイツ語学習者のペア 3 組を対象に、e メールとインターネット電話を使って 5 週間にわたって行われたタンデム学習の中で、それぞれの動機がどのような理由でどのように変化したかを、メールやチャットのログ、事後インタビューなどの多様なデータをもとに明らかにしようと試みた研究である。本論文は 10 章と参考文献、資料からなり、A 4 判、407 ページに及ぶ。第 1 章では、1960 年代後半に生まれたタンデム学習という外国語学習の方法が、現在までどのように発展してきたかという歴史を概観している。第 2 章では、タンデム学習と第二言語学習の動機づけの先行研究について整理し、その問題点を指摘した上で、本研究の立場を明らかにしている。第 3 章では、本研究の方法論として用いたケース・スタディについて、その特徴と種類、分析方法を述べている。第 4 章では本研究の調査として実施した E タンデム・プロジェクトについて解説している。第 5 章では、第 2 章で述べたタンデム学習および第二言語学習の動機づけの先行研究の知見をふまえ、問題の所在を明確にし、本研究の目的と、リサーチ・クエスチョンを提示し、研究デザインを示している。第 6 章から第 8 章は、それぞれ 1 組のペアのケース内分析で、それぞれの学習者の動機がなぜどのように変化したかを記述している。第 9 章のケース間分析では、ケース内分析の結果をふまえて 3 つのケースの比較を行い、タンデム学習が続かなくなる原因を検討している。第 10 章では、ケース内分析、ケース間分析の結果を総合し、E タンデムが続くかどうかを左右する要因についての結論が述べられ、提言と今後の課題が示されている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は E タンデムという、新しい外国語学習の方法をとりあげ、どのような要因が、学習の継続を阻害するのかについて明らかにしている。インターネットの普及により、外国語学習の機会は劇的に拡大したが、その反

面、教師も学習者もそれをうまく利用できないという問題も、指摘されている。E タンデムにおいても、授業の一環としてタンデム学習を組織する教師の多くが、タンデム学習を継続させることの難しさを経験していることが報告されている。そのような中で、膨大なデータを緻密に分析し、6名の大学生の心の動きを捉えようとした、この研究は、タンデム学習を組織する教師に多くの示唆を与えてくれる。これは、タンデム学習が始まり、現在まで広く実践されているヨーロッパの外国語教育研究の中でも、学問的にも実践的にも価値のある研究であり、タンデム学習がまだほとんど行われていない日本語教育では、非常に斬新な研究であると言える。

従来のタンデム学習の研究のデータは、チャットのログのみ、あるいはインタビューやアンケートのみというものが多く、タンデム学習という場を包括的に記述するものがほとんどなかった。本研究は、調査期間は5週間という短い間であるが、その前後を含めて、多様で膨大なデータを収集して丁寧に分析し、「タンデム学習の場で起きたこと」、「それを取り巻く学習者の生活の中で起きていたこと」そして、「学習者の気持ち」を関連づけて、記述した点も評価できる。

しかし、本研究に弱点がないわけではない。その一つは、インターネット電話による会話の文字化が一部でしか紹介されていないことである。学習者たちはインタビューで、インターネット電話での会話がやる気を高めたと話しており、インターネット電話の会話自体の分析を行うことで、タンデム学習の場で起きることと、動機の変化の関係をより説得力をもって示せたのではないと思われる。また、第9章のケース間分析が、本研究の中で観察された、「続かない」という現象（パートナーとの連絡を断つ、パートナーとは定期的に連絡をとっているが、外国語の学習はしていない、eメールを書くのをやめてインターネット電話だけを使う）だけに焦点をあて、動機づけのメカニズム全体に言及していないことも惜しまれる。さらに、タンデム学習の重要な原則の一つである学習者オートノミーに関して体系的な言及がなく、学習者オートノミーと動機づけとの関係について、データの考察において十分な議論がなされていないこと、外国語教育研究という学問領域全体の中での本研究の位置づけが明確に示されていないことも残念である。しかし、これらの弱点は本論文の博士論文としての価値を減じるものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。